

令和5年度

不登校対策に係る 取組事例



取組事例から学ぶ

不登校対策に係る取組のポイント

- ★ 学校が安全・安心な居場所となる「魅力ある学校づくり」を進めること
- 1 個に応じた「分かりやすい」学習指導の充実を図ること
- 2 児童生徒のSOSを受け止める教職員の力の向上を図ること
- 3 学級担任や教育相談コーディネーター、養護教諭、SC、SSW等とが連携し、多角的・多面的な児童生徒理解を可能とする教育相談体制を築くこと
- 4 校内教育支援センター等で、安心して過ごせるようにすること
- 5 オンラインやICTを適切に活用し、教育機会の提供や客観的な児童生徒の状況把握を進めること
- 6 校種を越えての情報連携を丁寧に進めること



岩手県教育委員会

不登校対策に係る取組事例

- 1 滝沢市立滝沢小学校・滝沢中学校……………P 2
「ジョイントアップ 滝沢小・滝沢中の児童生徒交流」
- 2 花巻市立矢沢小学校・矢沢中学校……………P 3
「『コネクトプロジェクト』小中の円滑な接続を目指して」
- 3 陸前高田市立気仙小学校……………P 4
「児童全ての学びの場を確保し、チームワークを活かした支援」
- 4 盛岡市立厨川中学校……………P 5
「教育相談活動と中央学習室の運営
～あなたの願いをかなえるために～」
- 5 一関市立藤沢中学校……………P 6
「安心して学べる学校づくり
～利他の心 人間関係を深め 心を育てる～」
- 6 宮古市立崎山中学校……………P 7
「積極的教育相談の推進～ロイロノートの活用を通して～」
- 7 久慈市立久慈中学校……………P 8
「生徒・職員一丸となった『プリベンション』
～発達支持的一次支援サービスの充実を目指した取組～」



滝沢市立滝沢小学校・滝沢中学校

ジョイントアップ 滝沢小・滝沢中の児童生徒交流

概要

滝沢小学校と滝沢中学校は、隣り合っており、その立地を生かして児童生徒交流を積極的に行っている。

① あいさつ運動

滝沢小学校の児童会執行部と滝沢中学校の生徒会執行部が中心となり、お互いの学校を訪問し合い、登校時間に合わせてあいさつ運動を行っている。



応援練習見学の様子



あいさつ運動の様子

② 応援練習見学

4月に滝沢中学校の全校応援を、滝沢小学校の応援委員と児童会執行部が見学に行った。そこで体験したことを運動会で役立てた。



陸上交流の様子

③ 陸上交流

市小学校陸上記録大会前に、滝沢中学校陸上部員が、滝沢小学校を訪問し、各種目に分かれて一緒に練習したり、小学生にアドバイスしたりしている。



DVD視聴の様子

④ 合唱交流

市小学校音楽会前に、滝沢中学校の文化祭合唱コンクールの映像のDVDを滝沢小学校の児童が視聴している。

成果

- ・小学生は、中学生と一緒に活動することで、中学校生活へ期待が膨らんだり、中学生への憧れを抱いたり、中学校への進学を、ギャップではなくステップと捉えるようになっていく。
- ・中学生は、小学生の頑張る姿を見て刺激を得て、自らの取組を振り返るきっかけとなっている。
- ・大規模校同士の交流となっているが、多くの児童生徒が関わりをもつことができている。

課題

- ・今後も、両校のスケジュール調整を図りながら、実施していきたい。

花巻市立矢沢小学校・矢沢中学校

「コネクトプロジェクト」小中の円滑な接続を目指して

概要

矢沢小と矢沢中では、両校が協働しながら子どもたちの生き生きとした学校生活と自己実現を願い、それぞれのよさを生かし、小中の接続の円滑化を図るために「コネクトプロジェクト」を立ち上げた。主な取組を紹介する。

(1) 教員同士のつながり

- ①児童情報交換会を年間4回設定し、主に小学6年生の現状や困難を抱えている児童について情報交換を行う。



児童情報交換会の様子

- ②相互に乗り入れ授業を年2回行う。小学校教員は中学校でT2役として、中学校教員は小学6年生に対して授業を行う。



乗り入れ授業の様子



(2) 学校と保護者のつながり

- ・小学校の児童と保護者に対して、中学校で教育相談を行う。(管理職・教育相談担当・養護教諭・特別支援Co等がそれぞれの立場で話を聴く)

(3) 児童・生徒のつながり

- ①生徒会主催による児童体験入学を開催し、小学6年生に中学校生活の紹介等を行う。



陸上指導の様子

- ②小学校の陸上記録会に向けた練習に、中学生が先生役となり陸上指導を行う。

成果

- ・6年生の現状や児童の情報を早めに得ることができ、入学前の教育相談を丁寧に行うことができた。
- ・教育相談を行うことで、児童・保護者の不安解消に繋げることができた。
- ・乗り入れ授業を行うことで、児童生徒の学びの様子や中学校における成長の様子を共有することができた。
- ・小中の教科指導の在り方を学び、各校における指導に活かすことができた。
- ・児童生徒が協働して活動する場を設定することで、入学後の見通しをもたせることができた。
- ・教職員の円滑な人間関係が出発点であるという認識をもつことができた。

課題

- ・具体的な取組を実施する場合の小中学校のスケジュールを合わせること。
- ・小中担当者同士の打合せの場を確保すること。
- ・小中教職員における、生徒指導や教科指導等の合同研修会の設定。
- ・コロナ禍において児童と生徒の交流が限られていたため、児童会と生徒会の活動場面を増やす工夫。

陸前高田市立気仙小学校

児童全ての学びの場を確保し、チームワークを活かした支援

概要

児童が学びたいと思った時に学べる環境を整え、ケース会議を定期的に行い各担当が情報を密に取ることを心がけ、全職員で情報共有しながらチームワークで支援している。

週1回昼休み時間等を使って、気になる児童生徒（昨年度30日以上欠席の児童）についてのケース会議を定期的で開催した。ケース会議は校長、副校長、生徒指導主事、担任、加配講師、教育支援コーディネーター、教育相談担当で現状確認や今後の見通しをもち、その後、職員集会等で全職員へ情報共有した。

さらに、月末には本人、保護者、担任による3者面談を実施し、月の振り返りや翌月に向けての学習や行事等の確認を行い、本人にイメージをもたせ、本人の納得できる短期目標の設定を行った。

教室の隣にある小教室をスペシャルサポートルームとして活用し、落ち着いた空間で自分に合ったペースで学習できる環境を確保した。教室に入りづらい時は、教室に近い入口をサブ玄関として活用し、本人や保護者の希望や状況に応じて、柔軟に対応した。

また、教育相談担当（養護教諭）が日程調整し、本人とともに保護者もスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーによる継続的な相談・助言を受けられるよう設定した。



3者面談の様子

成果

- ・本人、保護者、担任の月末の3者面談により、今月のがんばりや来月の見通しを3者が共有し、本人が目標を設定することで、同じ方向を向いて進めることができ効果が上がった。（2学期以降欠席0）
- ・朝、登校をしぶる場合でも、入りやすい入口や落ち着ける場所を本人に選択させ、自分に合ったスペースを確保することで、在校時間を徐々に増やすことができた。
- ・児童にとって保護者の協力は必須である。スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、養護教諭が専門性を発揮し、保護者や児童の心の安定を保つためのきめ細かい支援を行い、保護者の不安を和らげることができた。

課題

- ・毎日登校できてはいるものの、遅刻や早退は継続中であるため、心地よい学習環境の整備を行い、柔軟に対応しながら、在校時間をさらに伸ばすように取り組んでいく必要がある。
- ・児童の特性に合った柔軟な学びの実現に向けた「授業」の改善をしていく。
- ・これまでの実践例に基づき、効果的な対応の方法を蓄積し、ケースに応じた支援の在り方を確立していく。

盛岡市立厨川中学校

教育相談活動と中央学習室の運営
～あなたの願いをかなえるために～

概要

本校は、生徒理解を深め、生徒一人ひとりのニーズに応じた支援を行うことを目指して、教育相談活動を行っている。相談内容は心の悩み、対人関係の悩み、生活・行動上の悩み、学習内容の習得に関する悩みなど多岐にわたる。これらの悩みを抱えて不登校あるいは別室登校となっている生徒等に対して、教室復帰するまでの学習の場として、平成24年度から「中央学習室」を設置している。



「中央学習室」の入口



「中央学習室」の様子①

サポートスタッフは主幹教諭、生徒指導主事、SC、SSW、スクールアシスタント、不登校対策相談員である。支援対象となる生徒の学級担任、学年職員と連携を密にとりながら、指導支援の充実を図り、不登校や別室登校の解消に努めている。また1日2～3時間の出前授業という時間割を設け、専門教科の教員による授業を行っている。出前授業は専門的な学びを深めるだけではなく、多くの教員と交流することで教室復帰への一助となっている。



「中央学習室」の様子②

チームによるサポートを確立するために欠かせないのが毎週金曜日に開催される相談部会である。メンバーはサポートスタッフに加え、校長、副校長、各学年主任、特別支援コーディネーター、養護教諭である。学校生活に抵抗感のある生徒や心配な生徒の情報が共有され、支援策を立てて実施するだけでなく、その振り返りを行い、次の支援に生かすという取組が継続的に行われている。

また、本校にはLD等通級指導教室（まなびの教室）が設置されているが、通常学級の生徒も受け入れて自立に向けた支援を行っている。このことは様々な生徒指導課題を予防する役割を果たしていると捉えている。

成果

- ・不登校、別室登校生徒への指導支援の充実が図られ解消にいたるケースも多い。
- ・相談部会等を通じて、生徒個々に対する共通理解が深まっている。
- ・SC、SSWを含む支援体制が構築され、組織的な支援を継続して行うことができている。また、外部関係機関との連携が図られている。
- ・教育相談活動や中央学習室の運営を通して、悩み事の相談や学校生活、学習に関する支援など生徒に寄り添ったきめ細やかな指導支援が実現している。

課題

- ・中央学習室における出前授業では、生徒一人ひとりの実態に応じた学習支援や評価について、今後も工夫や職員全体での共通理解が必要である。
- ・相談部会等で個々に対する共通理解は深まっているが、具体的にどのように支援していくのか更なる組織的な体制を構築していかなければならない。

一関市立藤沢中学校

安心して学べる学校づくり ～利他の心 人間関係を深め 心を育てる～

概要

学びの場の確保や安心して学べる学校づくりを推進し、社会に自立する生徒を育てるために以下のような取組を行った。

①多様な学びの場の確保

職員室の隣に「学習室」を設けている。学年の教師の他、学校サポーターを配置し学習等の支援をしている。衝立で仕切り、レイアウトを工夫して、一人一人が学習に集中できる空間を作った。

また、個々の生徒に応じてタブレットや ICT 機器を活用して、教室の授業をライブ配信するなど柔軟に実施している。



「学習室」内の様子

②学校体制について

校長、副校長、生徒指導主事、学年主任、養護教諭、担任等で構成した「生徒支援会議」を定期的実施している。さらに迅速に情報共有や対応方針が決定できるよう、生徒指導相談票の回覧と関係者による「小会議」を頻繁に実施した。

このほか、講師を招いて Q - U の研修会を開催し、職員の生徒に対する多角的な見方、支援の工夫について理解を深めた。



ICT 機器を活用している様子

③「他人のために行動できる生徒の育成」

他人に感謝し、感謝されることが仲間や社会とのつながりを強めるということを常に生徒、職員間で大切にしている。「他人のために何ができるか」という視点で行われる生徒会主導による「縦割り清掃活動」や「社会への支援活動」を通じて、自己肯定感、自己有用感の向上に努めている。

成果

- ・ 職員の支援や ICT 機器の柔軟な活用が学習の場と機会の保障することにつながった。「学び」をあきらめさせないことができた。また、3年生全員の進路を拓き、次のステージへつなぐことができた。
- ・ 生徒支援会議及び小会議により、教員の課題意識が高まり、生徒が困っていることや解決すべき事案の把握や、その解決に向けた積極的な生徒指導を行うことができた。生徒指導に関する様々な諸問題等の対応がスムーズとなり早期解決が図られた。
- ・ 地域の施設や校内での「雪かき」の手伝い、赤い羽根共同募金、能登半島地震の被災者への募金活動に取り組むなど、他者から喜ばれ、認められる場面を主体的に設定することができた。



募金活動の様子

課題

- ・ 不登校生徒が抱える複雑な不安や悩み等に対応するためには、「学校」「保護者」「専門機関」三者の関係づくりが更に重要になってくる。
- ・ 生徒会主導による「他人のために行動する」活動のほか、個人や学級集団の活動も重視していきたい。活動自体が目的にならないよう賞賛される方法や場面を工夫することによって、生徒の自己有用感と自己肯定感を更に高めていきたい。

宮古市立崎山中学校

積極的教育相談の推進～ロイロノートの活用を通して～

概要

今年度は全校生徒を対象として教育相談アンケートを毎週実施している。ロイロノートを活用し、「何か相談したいことがあるか」といった質問をしている。また、月の最終週にはいじめに関わる項目を含めて紙面でのアンケートを行っている。この取組は、朝読書の時間を活用し、その日のうちに集約をして全職員で回覧している。生徒から相談を希望された職員が、すぐに話を聞くことにしている。

相談希望調査

【1】【全員】誰かに相談したいことがありますか？「話をしたい」「聞いてほしい」という人は2～4に回答を！*

①相談しなくてよい【質問4へ】

②今すぐ相談したい【質問2へ】

③できたら相談したい【質問2へ】

④相談するか迷っている【質問2へ】

【2】【質問1で②～④を選択した人のみ回答】誰に相談したいですか？（複数選択可）（複数選択）

担任の先生

学年の先生

部活動の先生

保健室の先生

スクールカウンセラーの先生

その他の先生

アンケート画面【1】誰かに相談したいことがあります

アンケート画面【2】誰に相談したいです

○他のアンケート項目（参考）

・今困っていることや悩んでいることはありますか？

○具体的な教育相談の流れ

①毎週月曜日にアンケートを実施（ロイロノートを活用）

②教育相談担当がすぐにアンケートを集約し、全職員で回覧

③教育相談担当と学年職員が連携を図り、生徒から希望された職員と連絡調整

④面談の実施

⑤対応職員と生徒指導主事、教育相談担当で情報共有（必要に応じてSC、SSWとも情報を共有）

⑥管理職（校長、副校長）にここまでの内容を報告

成果

○ロイロノートを活用して生徒の悩みの早期発見、早期対応が可能になった。

・4月～12月までの9ヵ月間で全校の1/3にあたる21人の生徒が悩みを相談する機会をつくることができた。

・SCとのパイプをつくることができ、延べ28人の生徒が面談できた。

・養護教諭に対して延べ58件の相談希望があったが、優先度等を考えて計画的に相談に応じることができた。

・ロイロノートを通じたものだけで、延べ137件の相談に対応することができた。

・ロイロノートを活用したことで相談しやすくなったと感じる生徒が52人（83%）いた。

課題

○アンケートの実施方法について検討する。

・週によっては1週間で相談に対応しきれないこともあった。「チーム崎山」として全職員が全校生徒と面談できるような関係性を構築していきたい。

・人目が気になり回答できない生徒に配慮して、家庭で回答するといった方法を導入する。

久慈市立久慈中学校

生徒・職員一丸となった「プリベンション」
～発達支持的・一次支援サービスの充実を目指した取組～

概要

本校では教職員及びSC、SSWと連携した「プリベンション」に力を入れた。プリベンションとは、単なる課題の未然防止ではなく、生徒が生き生きと活動する空間を生み出し、また生徒が発信する困り感を小さなうちに防いでいくことである。今年度は特に下記の3点を徹底した。

①SCと連携し【心理的安全性】の向上を目指した学年授業「心のサポート授業」の充実及び道徳教育の推進

各学年の実態に合わせ、SCによる学年授業を企画。日々の教育相談、SSWとの共有を生かし、生徒の内面に働きかけた。道徳授業も学年職員一丸となって実施している。



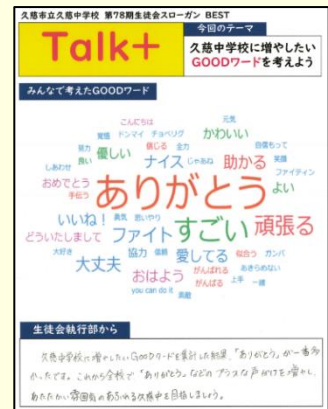
心のサポート授業の様子

②生徒指導主事による指導部通信「正義&明朗」の発行と生活状況アンケートの改定

校内の「乱れ」「崩れ」「荒れ」に繋がりそうな危険因子の共有のみならず、学校内の前向きな生徒指導内容の紹介を行う。学年の枠を越えて、職員みんなで共有し、生徒に還元できるようにした。また、いじめアンケートを「生活状況アンケート」と改名し、一部内容を変更して生徒の内面理解に努めた。

③全校生徒会による四代文化伝統・二活動二運動を生かした活動「TALK+（トークプラス）」

「思いやり」をキーワードに通年を通した活動を作った。Good wordを学級で考え、定期的に短学活時にミニ学級会を行ったり、全校集会で報告したりするなどして、良好な人間関係づくりの一助とした。可視化し、全校生徒が目につけられるようにした。



全校生徒会がまとめたもの

成果

- ・生徒の困り感を小さな段階で認知したことで、教育相談数が減少し、SC及びSSWを積極的且つ肯定的場面で生かすことが出来た。「心理的安全性」が高まり、安心して諸活動に取り組める生徒が増えた。
- ・以前は不安や悩みを抱えていたとしても、前向きに生活を送ることが出来る生徒が増えた。
- ・授業中のコミュニケーション向上や男女の関わりが増えたり、自分一人で堂々と話ができるようになったりと、良好な人間関係作りのみならず、自己肯定感の高まりにも繋がった。
- ・「いじめ」という言葉を使わず、「思いやり」を生かしたことで、学校全体に明るさ、誠実さが生まれた。人間関係づくりだけでなく、積極的なボランティア活動や心配りが出来る生徒が増えた。

課題

- ・生徒会活動において、活動によって得られたものの活用法を工夫するなど、より実生活に生かせるようにする。
- ・職員による生徒指導研修会や事前指導の充実を図り、プリベンションスキルを向上させる。
- ・長期的且つ全生徒に対して効果を得るには、より多様なアプローチが必要となる。職員、SC及びSSWとの情報共有をさらに迅速、丁寧に行う必要がある。